

Title	大阪の復権を考える
Author(s)	辻野, 直三郎
Citation	makoto. 1980, 32, p. 3-4
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/86094
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

大阪の復権を考える

財団法人大阪防疫協会

理事長 辻野直二郎

(一) 適塾と近代日本への礎

緒方洪庵によって創立された蘭学塾(私塾)適々齋塾(適塾)は、その主眼を蘭、医学の研修としながら、オランダ語を通じて西洋文化の修得にあったことは、適塾に学んだ多くの逸材の続出によっても明らかであるばかりでなく、明治維新の興隆に寄与貢献したことは大であり、歴史の証明するところである。

この点において、浪速の地に生を享ける人々は先人の偉業を偲び、さらに大阪に活力を取戻すためにもこの際先人の築いた偉業に思いを新たに、府民協力一大奮起を致したいものである。

緒方洪庵と適塾の推移

適塾は大阪市東区北浜三丁目三〇番地所在、史跡、重要文化財である。

最初一八三八(天保九)瓦町に私塾(官学に対し)として開き、次いで一八四三(天保一四)過書町の町家であった現在地に移った。建物木造一部二階建、建面積二八五㎡延面積四一七㎡

昭和五十一年十一月文化庁が工費一億二千万円(解体、修復工事費)にて着手五十五年五月十九日完工式を行った。

緒方洪庵略歴

時代江戸末期

(自一八一〇(文化七)至一八六三(文久三))

備中足守の人(現岡山市)名、章字公裁、洪庵と号す江戸末期の蘭学者

1. 十七才の時医学を志し大坂に出て中天遊の門に入る。
 2. 二十二才の時江戸に行き坪井信道、宇田川玄真らにつき蘭学を修む。
 3. 二十九才の時(一八三八)大坂に帰り医業に従事、傍ら蘭学塾「適塾」を開く。
 4. 一八六二(文久二)江戸幕府の奥医師兼西洋医学所頭取を命ぜられた。
- 翌一八六三(文久三)没す。維新黎明期に活躍、適塾に学んだ主な人材
- 村田蔵六(後の大村益次郎)

(二) 兵制の創始者

佐野常民

日本赤十字社初代社長

大島圭介

函館五稜廓の変に投じたが後ゆるされて外交官として活躍

橋本左内

勤皇志士として活躍

長与専斎

内務省初代衛生局長、衛生行政の確立者

緒方洪庵の主たる著書

一、夜学通論

二、現代の病理学総論

三、虎狼病治準

四、コレラ対策書

五、扶士経験遺訓 三〇巻

六、ドイツ医ベルリン大学教授フーペラントの著書の訳

七、扶氏医戒の略

現代に通ずる医業の本体を記述したのみならず時代を超越した万人への戒とすべき高邁な思想の発露によるものである。

一、二ヶ条に分つ、その一

一人の為に生活して己のためだけに生活せざるを医業の本体とす安逸を思いづ名利を顧みず唯おのれをすてて人を救はんことを希ふ次て人の生命を保全し人の疾病を復治し人の志を寛解するの外他事あることのある

以下十一ヶ条省略

蘭学発展の経過

蘭学草創の経過を大槻玄沢(一七五七、宝暦七)一八二七、文政一〇)江戸時代中期の蘭学者が次のように語っている。

「白石新井先生に草創され昆陽青木先生に中興し蘭化前野先生に休明し鷗齋杉田先生(註四)に隆盛す」と明言している。その大槓は杉田、前野に学びさらに長崎に遊んで本吉雄らの通詞(通訳)に従学して「蘭学楷梯」をあらわしてオランダ語の文法的学習の道を開き「解体新書」を修訂して「重訂解体新書」を刊行、また家塾「芝蘭堂」を開き多くの門人を養成し橋本宗吉、宇田川玄真、稲村三泊、山村昌永、小石元俊ら全国に及び蘭学の主流をなすに至った。

「蘭学」の「呼称」の始め前野良沢、杉田玄白、中川淳庵、桂川甫周らの手による有名な「解体新書」(註三)が一七七四(安永三)刊行された。これら西洋解剖学の知識が学問的でありこの記述の過程において自分の成果を「蘭学」と呼んだ。これが「蘭学」名称の始まりであると伝承されている。

蘭学の素地

江戸時代の一六一五(元和元)頃からオランダ語を通じて行なわれた西洋諸科学、特に医学はその中心をなしたもので西洋事情に関する研究、知識を吸収した。その内容は医学、本草学、天文曆学、物理化学、地理学などあらゆる部門にわたっていた。十七世紀初めには、オランダとの交渉が始まって以来「長崎出島」(註二)を拠点とするオランダ商館の門戸を通じて、オランダ人医師によって文化、學術特に医学が急速にその道を開かれるに至った。徳川吉宗の時代にはいって、幕府権力の擁護策としてオランダ商人を通じて西洋の知識を得ようとし、自然科学の奨励、施設の特徴であった殖産興業などを重視し蘭学の発展に影響を及ぼした。

特色

官学はもともと幕府又は藩の庇護下において設立、経営された学問教育機関であるのに対し、私学(塾)は一部のすぐれた指導者によって自ら信ずる学派或いは流派を自己の努力、経営又は町人らの援助のもとに行なった学問、教育の場所であると解す

